



日本学士院ニュースレター

明六社だより

トピックス：

第99回日本学士院
賞受賞者から寄稿
いただきました。
秋の公開講演会を
開催します。
第4回日韓学術
フォーラムを開催し
ました。
新客員2名を選定し
ました。



(東京学士会院・帝国学士院の会館) 創設当初は、文部省内の修文館、湯島の昌平館、上野公園内の教育博物館の講義室などを転々としていましたが、明治17年9月、上野公園内旧四軒寺跡(東京美術学校(現：東京芸術大学美術学部)内の一角)に上掲写真のような独立の会館を新築することとなります。その後、大正15年に現在の場所に帝国学士院会館、昭和49年に現在の建物、日本学士院会館が建てられます。

来年に日本学士院賞授賞式は第100回を迎えます。この写真の会館で、明治44年、記念すべき第1回授賞式が行われました。

シンボルマークの由来

「古事記」にも記されている「長鳴鳥(ながなきどり)」は、日本の黎明を告げる鳥という由来があります。鳥は花や草木と一対で描くと、平和で豊かな世界を願う心が映し出されるということで、桜花と対にし、本院のシンボルマークとしました。

目次：

第99回日本学士院賞受賞者寄稿	2		
講演会レポート	8	新客員の選定	17
外国アカデミー等との交流	9	総会における論文報告・談話	17
第4回日韓学術フォーラム	10	(寄稿文)3年3ヶ月の在籍で...	18
第51回公開講演会のお知らせ	12	第1部部長の決定	19
その他の講演会等のお知らせ	13	会館施設の利用案内	19
所蔵資料の紹介 (オランダ商館関係資料)	14	寄附のご案内	19
第1000回を迎えた第1部部会	16	会員・客員の逝去	20
		編集後記	20

第99回日本学士院賞受賞者寄稿

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、日本学士院第99回授賞式を平成21年6月1日(月)に日本学士院会館(東京・上野公園)で挙行了しました。本年の授賞は、恩賜賞・日本学士院賞2件、日本学士院賞7件、計9件10名でした。

- 恩賜賞・日本学士院賞 -

村上 哲見 (東北大学名誉教授)
江口 徹 (京都大学基礎物理学研究所所長・教授)

- 日本学士院賞 -

川人 貞史 (東京大学大学院法学政治学研究科教授)
安藤 隆穂 (名古屋大学大学院経済学研究科教授)
竜田 邦明 (早稲田大学理工学術院教授)
矢川 元基 (東洋大学計算力学研究センター長・同大学院工学研究科教授
東京大学名誉教授)
渡邊 貞 (独立行政法人理化学研究所次世代スーパーコンピュータ
開発実施本部プロジェクトリーダー)
武田 和義 (岡山大学名誉教授)
清水 孝雄 (東京大学大学院医学系研究科長・同医学部長・教授)
御子柴克彦 (独立行政法人理化学研究所脳科学総合研究センター
発生神経生物研究チームリーダー
東京大学名誉教授)



両陛下をお迎えする受賞者

受賞者10名から...授賞式を終えての思い!!

望外の幸せ

村上 哲見

わたしは「宋词に関する研究」によって賞を頂いたのですが、この「宋词」については一般の方には説明が必要かと思えます。中国の詩は唐代に絶句や律詩などを生み出してひとつの頂点に達しますが、その唐代の中ごろから歌謡を母体とする新しい韻文文学が育って参ります。これが「詞」と呼ばれるもので、次の宋代には高度の文芸性を備えるようになり、唐詩に続く韻文文学として「宋词」と称されるのです。しかしわが国では奈良平安時代から唐詩は広く愛読されましたが、宋词にはあまり関心が及びませんでした。私自身、漢文が好きで論語や唐詩などは中学のころから読んでおりましたが、宋词については何も知りませんでした。大学で中国文学を専攻するようになって宋词に出遇

い、初めて唐詩などとは違った抒情詩の世界があることを知って勉強を始め、卒業論文もこれをテーマにしました。以来五十余年、わが国の中国文学研究には宋词に関する蓄積が乏しかったのでそれなりの苦労はありましたが、もともと好きで始めたこの仕事、それによってこのような光栄ある賞を授けられたことは望外の幸せというほかはありません。近年は宋词を研究する人が増えて来て宋词研究会という組織が生まれ、毎年専門誌を発行しておりますが、かつては想像もできなかったことです。わたしの仕事はいわば基礎作業のようなもので、若い人たちがこれを踏み石にして今後更に発展してくださるよう願っております。



両陛下に研究内容を説明する村上受賞者



学士院賞授賞式の思い出

江口 徹

授賞式が行われた6月1日は大変思い出に残る1日となりました。

始めに陳列室で陛下に自分の研究をお話したときには、やはりかなり緊張しました。専門的な話を短い時間でお話するのは難しいので、日本の素粒子論の伝統や私の研究の位置付けなどをお伝えできれば良いかと思いましたが、陛下は大変に旺盛な学問的好奇心をお持ちで、研究の具体的な内容をもっとお聞きになりたかったようにもお見受けしました。

午後の宮中のお茶会の席では皇后様から「ゲージ理論のゲージというのは編み物をしたりするとき等に使うゲージ

と同じですか。」というご質問があり、大変に見事なご質問でびっくりしました。ゲージ理論という術語はワイルという数学者が初めて用いた物ですが、まさに長さを測る尺度の取り方によらない理論と言う意味で、物理の専門家にも必ずしも知られていないことです。

夜の晩餐会はくつろいだ雰囲気の家内共々楽しく過ごさせて頂きました。最後は、久保学士院長の見事なお話があり大変に感銘を受けました。朝早くから夜9時頃まで長い1日でやや疲れましたが、生涯忘れられない日となりました。



江口受賞者の説明を熱心にお聞きなる両陛下



両陛下への研究ご説明

川人 貞史

学士院賞授賞式の前に、授賞対象となった研究について、研究資料を展示し、天皇皇后両陛下にご説明する時間があります。与えられた説明時間は3分以内、ご質問への回答は2分以内ですが、説明のために15枚の説明や図を作成したので、ボードにすべてを貼ることができず、著書、資料とともにテーブルにも陳列することになりました。『選挙制度と政党システム』および『日本の国会制度と政党政治』に関する計量的分析の結果をまとめたグラフを数多く準備し、時間を超過すると私のあとの受賞者の説明時間が短くなることを心配して、私は、ご説明したい内容を少し早口で話したように記憶しています。準備した資料も、ご説明の内容も、欲張りすぎてしまい、もう少し、ゆとりをもってでき

ればよかったと少し反省していますが、他面で、やはり、お話ししたいことをともかくも両陛下の前でお話しできたことに、満足してほっとしたことも思い出します。戦後の国会の長期的変化として多数決による議事運営の増加や議員立法の減少について、グラフでご説明したのですが、天皇陛下からは、「議員立法が減ったのはどうしてですか。」とご質問いただき、「政府が本予算の他に予算を必要とする議員立法を嫌い、自民党政調会部会と大蔵省、各省とが調整して、政府提出法案として行うように整備されて、議員立法が減少しました。」とお答えしました。これは、私の研究の重要なオリジナルな結論の1つであり、それを陛下に的確にご質問いただいたことが強く印象に残っています。



賞状及び賞牌を授与される川人受賞者



授賞理由等の詳細は、日本学士院ホームページをご覧ください。
<http://www.japan-acad.go.jp/>

授賞式：学問の素晴らしさ

安藤 隆穂

授賞式に出席し、学士院会員の諸先生にお会いし、いただいた賞の重みを改めて認識いたしました。私の研究分野の尊敬する先達に加えて、他分野の最高の研究者にも接することができ、至福の時でした。たとえば、祝賀会の折に地球物理学の上田誠也先生にお声をかけていただきましたが、先生は、私が青春時代感動し繰り返し読んだ本の著者であり、本当に感激いたしました。

両陛下への研究説明は、緊迫した準備過程からして、研究の自己点検の絶好の機会となりました。陛下には、フランス革命以前の自由の意味について鋭いご質問をいただき、学問好きの陛下の日頃の勉強のご様子を想像することができました。象徴として生きることを選ばれた陛下におかれましては、とりわけ学問の場で、自由をお感じになるのではないかと推察いたしました。皇居

でのお茶会では、皇后陛下より、ご自身の教育経験に結び付けてフランス革命期の教育についてお尋ねいただき、感動しました。また、皇太子殿下には、ご自身が英国留学時の研究主題とされたイギリスの運河史を話題にいただきました。それをきっかけに、18世紀フランスの運河に話が及び、学会のような議論となりました。私はフランクになりすぎ、失礼があったことを恐れますが、どこにおいてもだれに対しても自由で対等な議論を戦わせることのできる学問の素晴らしさを実感いたしました。

文部科学大臣主催の晩餐会では、学問の将来についての議論が活発になされました。どなたも基礎研究の重要性を強調され、同様の思いを持つ私は心強く思いました。長い緊張した一日を無事終え、受賞の喜びを胸に、学問を担うものとしての責任を果たしていくことを決意しました。



授賞式前に会員と懇談する安藤受賞者(左から3人目)



展示室で会員と懇談する安藤受賞者(中央)

日本学士院賞を受賞して

竜田 邦明

「亀の甲がたくさんありましたね。たくさん合成されたので。」「亀の甲だけでなく、真っ直ぐなものもありましたね。」と天皇皇后両陛下からお言葉をいただきました。原料の糖質を一旦真っ直ぐな構造にして炭素鎖を延ばしてから、両端を結合させて大きな環状化合物を合成していたので、研究の本質に触れていただいたような気がしました。宮中でのお茶の会の一コマであるが、和やかな雰囲気でお二人の我々に対するお心遣いが感じられました。さらに、昭和34年に大学に入ったので絶対忘れない日と思い、御成婚の日にお二人から東京に住み票を移したという話をした所、大層喜んでいただき会話も弾み、ようやく落ち着きを取り戻しました。

しかし、午前の授賞式では壇上で賞状と賞牌をいただいた直後から年甲斐もなく感極まり、まさに賞の重さを実感

して賞状に見入っていました。

文部科学大臣主催の晩餐会で、久保院長がご挨拶をされ、「ここにいる受賞者も含め研究者は“変な人”が多いので、奥様方は大変だったでしょう。ご苦労様でした。」と労をねぎらわれました。この話に家内は「研究者はやはり変わった人が多いので一般の人と違うことができるのね。」と私のことを見直してくれました(?)。したがって、今回の受賞はお世話になった周りの方々にも家族にも研究者として認められた最高のできごとであり、喜びでもありました。

数日後、ケンブリッジとオックスフォードの話をさせていただいた皇太子殿下から御著書『テムズとともに』が届けられ、そのご配慮に感激を新たにしました。

皇居お茶会での両陛下との会話から

矢川 元基

このたびの日本学士院賞の受賞は私にとって大変光栄であり、同時に、この賞の重みといったものをますます実感しております。平成21年6月1日は私にとってきっと一生忘れない日になることでしょう。早朝から夜までめまぐるしい一日でしたが、充実という言葉そのものでした。午前の日本学士院での式典、午後の皇居でのお茶会、夕方の東京プリンスホテルでの文部科学大臣主催晩餐会と、そのひとつひとつがとても大きな行事でした。

特に、天皇皇后両陛下、皇太子殿下および正仁親王同妃殿下とともに2時間もの間、フランス料理を頂きながら過ごした皇居連翠の間での午後のお茶会は一言では表現できないほどの素晴らしさでした。偶然にも、天皇陛下のチェロの先生と同じ先生にチェロを習っていたことがあり、このことをきっかけに、天皇皇后両陛下とは、しばし音楽の話でもりあがりました。練習の話になり、天皇陛下のチェロの伴奏にさしつかえな

い程度に(ピアノを)練習しておりますと皇后陛下が大変控え目におっしゃっておられたのがとても印象的でした。皇太子殿下とは、ご専門のテムズ川のことではいろいろと話が発展しました。後日、ご自身のご著書、『テムズとともに』(学習院教養新書)を送って下さいました。音楽に関しては、今、オーケストラでチャイコフスキの悲愴交響曲を練習中であり、ご自分が弾いておられるヴィオラの出番がたくさん出てくるので大変楽しいとおっしゃっておられました。正仁親王と同妃殿下からは、「最近天気予報はよく当たるようになりましたが、地球温暖化の予測はコンピュータシミュレーションで正確にできますか。」と、きわめて的を射た質問をいただきました。「明日の天気予報に比べるとまだまだ不十分です。100年後の予測は最新のスーパーコンピュータを使ってでも大変難しいのが実情です。」とお答えするほかありませんでした。



研究展示と矢川(左)・渡邊(右)受賞者



第99回授賞式式場風景

日本学士院賞受賞に際して思うこと

渡邊 貞

日本学士院賞を受賞したことは、大変光栄であると共に、授賞式を終えて、賞の持つ重みを改めて噛み締めております。特に、受賞理由が、私が民間の会社に勤務していた時の業績であり、民間では主として開発の現場にいた者としては、個人に対してと言うよりも研究開発に携わった多くの関係者を代表して受賞したものと受け止めています。また、戦後10年、「日本の生きる道は技術だ。」と、ことあるごとに仰っていた小学校の恩師のご期待に応えることが出来たかと思っております。

授賞式に先立つ陳列品御覧では、僅か1分間ではありましたが、スーパーコンピュータの性能向上は、主として半導体技術の進歩と演算の並列化技術によってもたらされて来たことをご説明申

し上げ、両陛下にもご理解頂けたものと思っています。陛下からのご質問に対し、スーパーコンピュータにより、将来は天気予報でも、集中豪雨などの局地予報がより正確に出来るようになることをご説明いたしました。授賞式後のお茶会においては、私に関する話題の多くは、気候温暖化に代表される地球環境問題と、先端技術の我が国の位置づけでした。先端技術、特にコンピュータ、半導体、通信の分野で、我が国は諸外国に比べ、技術では決して遅れてはいないことをご説明申し上げました。両陛下をはじめ、皇族の方々も先端技術への関心を深くお持ちであり、我が国は、科学技術の振興に、より一層力を入れていくべきとの思いを強くした次第です。

Feed the World!

武田 和義

近年、平時において飢餓が起こることは滅多にないが、飢えと病気は我々の生存を脅かす二大要因であり、Feed the Worldが我々の使命です。近未来において人口が安定化したとしても、肉や乳製品などを多く含む贅沢な食事に対する需要は間違いなく増えるので、家畜などのエサを含む穀物消費が増大することは明らかです。一方、世界の農耕適地はほとんど開発し尽くされており、天然林や半乾燥地の農地化は地球環境に大きな負荷を与えることは良く知られています。また、現有の農地に大量の肥料や農薬、灌漑水を投入して収量を増大することも環境や資源に大きなインパクトを与えます。残された安全な増産の方策は生物の遺伝的な機

能を開発、強化することです。とは言っても生物の遺伝的能力は30億年余の進化の歴史の総決算であり、魔法のツエの一振りによって倍増するようなものではありません。

我々は既存の作物のみならず微生物や野生植物などに含まれている未利用の遺伝資源(遺伝子)を開発・利用することによって、ゆっくりではあるが着実に生物生産の能力を拡大しており、これが今回の学士院賞につながっています。とは言え、世界の食糧の需給バランスは極めて微妙なところがあるので、異常気象や地域紛争などに備えた安全保障システムの構築が必要です。世界の平和と協調がすべての基本であります。

楽しくまた充実した一日

清水 孝雄

展示物の前では、3分という制約があったため、両陛下にはごく簡単なご説明しか出来ませんでした。二つの本質的なご質問を受けました。「関節リウマチの治療はどの程度発展するのでしょうか。」「痛みとはどの生物まで持っているのでしょうか。」「緊張しながらお答えしました。

宮中のお茶会はさらに楽しいものでした。ほぼ15分ごとに皇族関係の方が交代で席を回って下さり、さらにゆっくりとお話する事ができました。

天皇陛下は先ほどの続きで「炎症の起源は?」とまた難しいご質問をされました。「調べておきます。」とお答えしました。脂肪を含む栄養の話、大腸がんと脂肪の関係の話、緊張の中にも和やかな気持ちになれる機会でした。

皇太子殿下とは昨年、東大医学部150周年記念式典でお会いしたことがあるため、殿下も覚えていて下さった様

で、山やテニスの話、野球少年だったと話題など、話が弾みました。気づいたら随分ワインを飲んでいたので、帰りのバスで私一人が赤い顔をしていました。

私は臨床医学を経験した後、基礎医学に移り、それ以来30年以上脂質の研究を進めています。プロスタグランジン、ロイコトリエンなどの脂質メディエーターの研究から発展し、今は膜脂質がどの様に多様性を確保するか、という生物学的に重要な問題にさしかかっています。日本ではこの分野の研究は伝統もあり、世界をリードしていました。しかし、水に溶けない分子を扱うのは簡単なことではなく、仕事も時間がかかります。若者はすぐ結果が出る研究に走りがちです。今回の受賞が、脂質生物学の研究者を刺激し、また、急速に減りつつある基礎医学研究者育成の励みになれば、とても嬉しいことです。それを感じた、重くも、楽しい一日でした。



授賞式前に会員と懇談する武田受賞者(左)



授賞式前に会員と懇談する清水受賞者(中央)

授賞式 - 忘れ得ない日

御子柴 克彦



御子柴受賞者の研究展示



受賞者記念写真(第99回)

私にとり2009年6月1日は、忘れ得ない日であります。学士院へ家内と二人の息子とともに招かれ、天皇皇后両陛下のご前で学士院賞を頂いたことは、大変な栄誉でありました。更に、感激致しましたのは、午後からの宮中でのティーパーティーでした。正式なフルコースの昼食であり、しかもすばらしいおもてなしをして頂きました。食事は大変すばしかったです。その上、料理が変わる毎に、両陛下、皇太子殿下、常陸宮同妃両殿下、宮内庁長官、侍従長等の方々がテーブルをお変えになり、各受賞者とお話になられるというすばらしいおもてなしを受けました。天皇陛下が私の横に、皇后陛下がその隣りにお座りになられ、食事を致しました。天皇皇后両陛下に、授賞式前に私の研究内容を短時間ですが、ご進講申し上げましたが、着席なされるとすぐに、「細胞の中にカルシウムの袋があり、そこから出るカルシウムが細胞の色々な働きをしていることは大変におもしろいですね。」とお話をされたことには、大変感激致しました。皇后陛下も大変に幅広いご興味をお持ちで、時間の制限

がなければいつまでもご質問が続いたことでしょう。常陸宮殿下は、NPOの日本パスツール協会の名誉総裁になって頂いており、私も副会長をさせて頂いております関係で話がはずみました。皇太子殿下は、7月に京都で開催される国際生理学会の開会式にご出席頂くことになっておりましたので、私は典礼委員長としてお迎えさせて頂きましてご挨拶をさせて頂きました。皇太子殿下はそのご予約も内容についてもよくご存知で、はじめてお話をさせて頂いたにも拘らず、楽しくお話をさせて頂きました。この様な打ち解けた形で、皇室の方々が受賞者をおもてなし頂いたことに深い感謝の意を捧げたく存じます。

夕方は、文部科学大臣主催の晩餐会であり、家内とともに招かれ、大臣はもとより文部科学省の方々も多数ご出席になられ、本当にすばらしい又、楽しい会でありました。

大変に長い充実した一日であり、多くの方々に祝福を受けたことに大変嬉しく存じ、また感謝申し上げる次第です。

天皇皇后両陛下は、授賞式に先立ち、受賞者の研究内容を展示室で御覧になられました。各受賞者は、自身の研究内容を簡潔に説明し、両陛下は熱心にお聞きになられ、ご質問をされました。

続いて、式では、天皇皇后両陛下御臨席のもと、久保正彰院長から10人の受賞者に賞状・賞牌が授与されました。

来年は、明治44年に「恩賜賞」「帝国学士院賞」が創設され、第1回授賞式が挙行されてから100回を迎えます。

授賞理由等の詳細は、日本学士院ホームページをご覧ください。
<http://www.japan-acad.go.jp/>

講演会レポート

1 第50回公開講演会

日時 平成21年5月23日

場所 くまもと県民交流館パレオ(熊本市)

今回は初めての熊本での開催となりましたが、高等教育コンソーシアム熊本の共催、熊本県・同教育委員会の後援を受けて、当日は高校生、大学生も含め262名と多数の方々が来場し、広い会場は満席となりました。

松尾浩也会員は、「熊本と刑法」というタイトルで、自身も熊本県出身でもあることから刑法学の発展における熊本県人の寄与について講演しました。また最近実施され関心の高い裁判員制度についても聴講者から多くの質問がありました。

入谷 明会員は、「クローン動物生産技術の有効利用」というタイトルで、畜産業におけるクローン技術の利用方法についてユーモアを交えた独特の語り口で講演を行いました。熊本では古くから牧畜が盛んであることから関心の高い内容であり、また最近発見されたマンモスの体組織からマンモスを復元する試みといった最新のトピックスにも触れ、聴講者の好評を博しました。

講演の後、熱心な質疑応答が行われ、当日出席した蒲島郁夫熊本県知事からも質問がなされ、講演会は盛況の内に幕を閉じました。



講演する松尾会員



講演する入谷会員

2 客員来日記念シンポジウム

「基本権保護義務と法律学の賢慮 - 「国法学」の現在」

日時 平成21年9月18日

場所 日本学士院会館

クラウド・シュテルン客員の来日を機に、シュテルン客員と樋口陽一会員によるシンポジウムを開催しました。

シュテルン客員が、「基本権の作用としての保護義務 - 法学上の発見」というタイトルでドイツ語による講演をされた後、樋口会員より「近代」の公理の法学上の再発見とその問題性」というタイトルで講演が行われました。

参加した101名の聴講者は日本語・ドイツ語を交え活発な意見交換を行いました。



講演するシュテルン客員



熱心に講演を聴く聴講者

シュテルン客員講演「基本権の作用としての保護義務 - 法学上の発見」の概要

戦後ドイツの基本権理論は、学説と連邦憲法裁判所の判例を通じて目覚ましい発展を遂げ、ヨーロッパの基本権理論にも大きな影響を与えてきた。その最大の成果が、基本権保護義務の「発見」である。基本権には、国家権力に対する防御機能だけでなく、生命や自由の保護を国家権力に義務づける保護機能がある。本講演は、基本権保護義務に関連する憲法判例を手がかりに、国家権力による基本権保護義務の貫徹にとともに生じる問題点に検討を加えることにより、この理論の現代的な意義を明らかにするものである。

外国アカデミー等との交流

ロンドン王立協会を始め、9カ国10機関と交流協定を結び相互訪問等を実施するほか、海外の学術団体等との学術交流を促進しています。



鄒愛蓮中国第一歴史档案馆館長と久保正彰院長



日本国際賞受賞者ら



英国学士院代表団と本院会員



Klaus Stern 客員夫妻の本院訪問

区分・相手先	会員等氏名	期間
瑞日財団	Edvard Fleetwood	21.2.9
日本国際賞受賞者	Dennis L. Meadows 博士 David E. Kuhl 博士	21.4.21
英国学士院	Duncan Gallie 教授 Peter Kornicki 教授 Sharon Strange 事務官	21.4.19 ~ 4.23
受入	鄒愛蓮 (中国第一歴史档案馆館長) 王道瑞、哈恩忠 (中国第一歴史档案馆館員)	21.5.13
日露関係史料をめぐる 国際研究集会2009	V. Sobolev (ロシア国立海軍文書館前館長) A. Sokolov (ロシア国立歴史文書館館長)	21.6.2
日露関係史料をめぐる 国際研究集会2009 (2)	S. Chernyavskiy (ロシア国立海軍文書館館長) M. Malevinskaja (ロシア国立海軍文書館副館長)	21.7.1
客員招へい	Klaus Stern 客員	21.9.12 ~ 9.27
国際学士院連合第83回 総会(ブエノスアイレス)	青柳正規 会員	21.5.18 ~ 5.23
ハンガリー科学アカデミー	上田誠也 会員	21.8.22 ~ 9.6
派遣	久保正彰 院長、古在由秀 部長、 井上明久 会員、伊藤 誠 会員、 貝塚啓明 会員、速水 融 会員、 堀川清司 会員、本多健一 会員、 三谷太一郎 会員、水田 洋 会員、 山崎敏光 会員	21.9.28 ~ 9.30

誌名の「明六社」とは・・・

明六社(めいろくしゃ)は、明治6年7月にアメリカから帰国した森有禮(もりありのり)が、後の東京学士会院会員となる福澤諭吉・加藤弘之・中村正直・西周(にしあまね)・津田真道・箕作秋坪・杉亨らとともに啓蒙活動を目的として結成した、日本で最初の近代的啓蒙学術団体です。

名称の由来は明治6年結成からきており、毎月2回(1日と16日)に会合を開くほか、『明六雑誌』を発刊しました。また、我が国の公開講演会は明六社をもって嚆矢とされています。

その後、明六社は明六会となり、東京学士会院、帝国学士院を経て、日本学士院へと至る流れの先駆となっています。

第4回日韓学術フォーラム

大韓民国学術院との共同事業である第4回日韓学術フォーラムは、平成21年9月28日～30日にソウル国立大学湖巖教授会館(韓国)において、『工業技術と経済』をテーマとして開催されました。今回は大韓民国学術院から多くの会員が参加し、本院会員を含めて80名近い出席者がありました。

第5回フォーラムは、平成22年9月末に東京で開催が予定されています。



大韓民国学術院会館ロビーにて



記念品を贈呈する久保院長(左)と金会長(右)



レセプション風景

持続発展型社会における金属系先端材料開発と産業化

井上 明久会員講演要旨より

現在の人類社会の基盤を支えている材料として、特に鉄鋼材料は、持続発展型社会の構築に要求される資源埋蔵量、リサイクル性、自然調和性および生産性等の主要条件を満たしているため、最も重要な基盤材料と見なされている。

このような中我々は新しい鉄合金を創出し、持続発展型社会の構築に貢献

すべく研究を行ってきた。我々が扱った鉄(Fe)基を始めとしてジルコニウム(Zr)基およびチタン(Ti)基バルク金属ガラスはこれまでの結晶金属材料とは本質的に異なった金属系先端材料として注目され、今でも世界中で研究が進められている。



講演する井上会員

日本の金融危機 - 1990年代の経験

貝塚 啓明会員講演要旨より

日本の金融は、1990年代に長期にわたり機能不全に陥り、経済全体が「失われた10年」と呼ばれた長期低迷を辿った。この間の経験を跡づけ、その原因と影響を検討した。

金融機関の行動、金融当局の対応など、いろいろな点で問題はあったにせよ、市場経済はこの種の不安定性を内

在的にもつというのが、私の基本的立場である。バブルの形成と崩壊のプロセスといえるこの時期が、経済理論からみてどのように理解されるかを論じ、現在の金融危機の理解に少しでも役立たせたい。



講演する貝塚会員



経済的発達と家族・人口パターン

速水 融 会員講演要旨より



講演する速水会員

資料には直接現れない17 - 19世紀の伝統日本の家族・人口パターンの地域的特質を探るため、歴史資料を通じて観察を行い、シミュレーションを行っている。

結果によると、伝統日本の家族・人口パターンは、大別して三つに分かれる。

東北型・・・男女とも結婚年齢は早いが出産数は少なく、1世帯に多世代が住み、規模も大きい。

中央型・・・男女とも結婚年齢は遅い。例外はあれど「イエ」概念に捕らわれることなく都市に出稼ぎに行き、そのまま居つく者も少なくなかった。

西南日本・・・結婚年齢は晚いが婚外子が多く、結婚しても離婚が多い。世帯の規模は大きい。

このように伝統日本は、決して一色の家族・人口パターンを持っていたわけではなかった。我々は、このような研究を日本一国内にとどめず、北東アジア全域に伸ばし、比較共同研究の実施を考えている。



フォーラム風景

異分野の協力による総合的現地調査の振興について

堀川 清司 会員講演要旨より

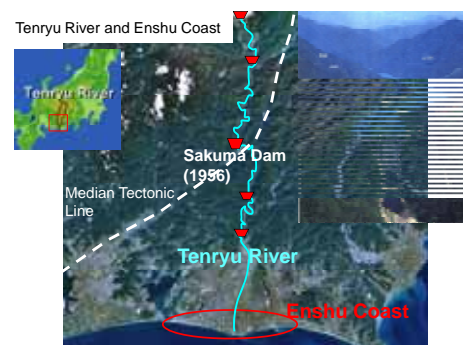


質問に答える堀川会員

1945年以降今日に至る60年余の間に、日本では国土の保全と開発のために様々な事業が行われた。中でも河川と海岸の土砂に関連した事業では、それぞれの場における土砂の問題を個別に取扱うのが通例であった。しかしながら、現実には土砂の動きは、河川から海岸に至る一つの流砂系を形成していることが多く、従来の個別の対応は必ずしも適切ではなかった。

近年、河川工学、海岸工学の研究者と技術者が協力して、河川・海岸を総合的に一つの流砂系として捉える試みがなされるようになった。その新しい動きの一つとして、科学技術振興調整費による研究プロジェクト(代表校:豊橋技術科学大学)がある。複数機関に所

属する研究者による、総合的現地調査であり、その意義並びに将来への期待について、その概要を述べる。



当日説明資料

第51回公開講演会のお知らせ

平成21年10月24日(土)、第51回公開講演会を日本学士院会館において開催します。

新開陽一会員が「金融危機後の米中経済調整」、須田立雄会員が「生物の進化と老化の観点から見た骨」というタイトルでそれぞれ講演を行います。

金融危機後の米中経済調整

新開 陽一 会員

米国発の世界金融危機の実相は少しずつ明らかになってきた。しかし危機が一応収束したのちのマクロ経済の姿、とくに米中の経済調整の姿は不明のままである。この講演では、サブプライム危機の背後にあるマクロ不均衡をやや詳しく解明し、そこから導きだされる米中調整の方向について若干の見通しを示してみる。

米中とも、消費・投資などの支出に関しては、かなりの意見の集約がすすんでいるかのごとくであるが、生産あるいは生産構造の調整については、あまり分析がすすんでいないと思われる。私はとくに中国の生産面の調整に新しい視点をあて、今後のマクロ情勢は楽観を許さないと指摘したい。



生物の進化と老化の観点から見た骨

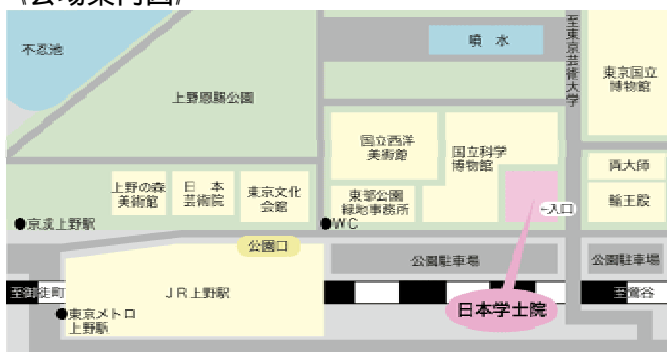
須田 立雄 会員

地球の歴史を1年に縮めてみると、人類は大晦日の午後11時59分に登場したに過ぎないという。45億年前に地球が誕生してから、永い、永い時間が経過した。現在、地球上には3,000万種を超える多様な動植物が生存している。その中で最も進化した生物は脊椎動物であり、その頂点に位置するのがホモサピエンス(現生人類)である。言うまでもなく、脊椎動物の最大の特徴は「脊椎(骨組織)」を持つことである。

最近の総務省の発表によると、わが国の65歳以上の高齢者人口は全人口の21.5%を超え、その実数は2,700万人に達したという。このような高齢社会を反映して、生活習慣病のひとつである「骨粗鬆症」などの骨代謝疾患を患う高齢者が急増し、その実数は1,000万人を超えたと推定されている。

この公開講演会では、生物の進化と老化の観点から見た骨の諸問題について、ご参集の皆様方と一緒に考えてみたいと思う。

(会場案内図)



お問い合わせ先

日本学士院 公開講演会係

〒110 - 0007

東京都台東区上野公園7-32

TEL : 03-3822-2101

FAX : 03-3822-2105

E-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp

Web: <http://www.japan-acad.go.jp/>

事前申込制・先着150名。
お車での来場はご遠慮ください。

その他の講演会等のお知らせ

平成21年10月以降に本院で開催を予定しているその他の講演会等をお知らせします。

開催日	内 容
平成21年10月31日 ～11月15日 (11月2日、9日、12日休館)	特別展「天皇陛下と日本学士院賞、宸翰英華」 (入場無料)
平成21年12月12日	日本学士院学びのススメシリーズ 「天文台の話」(古在由秀会員)

特別展「天皇陛下と日本学士院賞、宸翰英華」

日本学士院では、毎年天皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ授賞式を挙行しています。この度天皇陛下御在位二十年を記念して、これまで御臨席いただいた授賞式を写真でたどり、また本院が昭和16年～25年にかけて出版した「宸翰英華」(宸翰とは、天皇自筆の文書のこと)のパネル展示を行い、祝意を表します。



「天文台の話」

日本学士院会員、第2部部長 古在 由秀

皆さん、夜空に輝く星を見て、いったいどうやって出来たの？どのくらい遠くにあるの？と考えたことはありませんか？そういった星に関する観測・研究をおこなっているのが「天文台」という所です。

天文台の歴史は古く、日本で天文台が出来たのは、17世紀末の徳川幕府の天文台で、それが浅草(台東区浅草橋三丁目)に移ったのは1782年です。ここで暦を作るのに必要な天体観測を行い、その暦を配布し、また日の出、日の入りの時刻を、鐘を鳴らして人々に知らせていました。

現在では、一般の人でも天体を観望出来る天文台があります。望遠鏡で見ると、月には模様があり、木星には明るい四つの衛星が回っているのが分かります。

このような話をわかりやすくいたしますので、是非いらしてください。



所蔵資料の紹介

オランダ商館日誌は、江戸時代に平戸および長崎にあったオランダ商館歴代館長が記した公務日誌です。

当時、江戸幕府が外交・貿易を制限した鎖国政策において、スペイン・ポルトガルなど国交が断絶していく中、外交・貿易の続いたオランダ。そのような鎖国政策に果たしたオランダの役割や近世日本の状況を知る上でも重要で、日蘭関係史の根本史料になるものです。

ハーグ国立文書館所蔵の平戸・出島のオランダ商館日誌および往復文書の

謄写事業は、大正11(1922)年にベルギーのブリュッセルで開催された万国学士院連合第3回総会において決議された在外日本関係史料調査事業の一環として行われたものです。

同謄写事業は、戦後昭和27(1952)年、国際学士院連合(万国学士院連合の改訳)総会での決議により、さらに収集範囲を拡げ、諸外国に存在する日本および東亜に関する未刊行史料の複本作成、翻訳研究の事業を東京大学史料編纂所に委嘱して行うこととなりました。

このコーナーでは、本院が所蔵する貴重図書・資料についてシリーズで紹介しします。

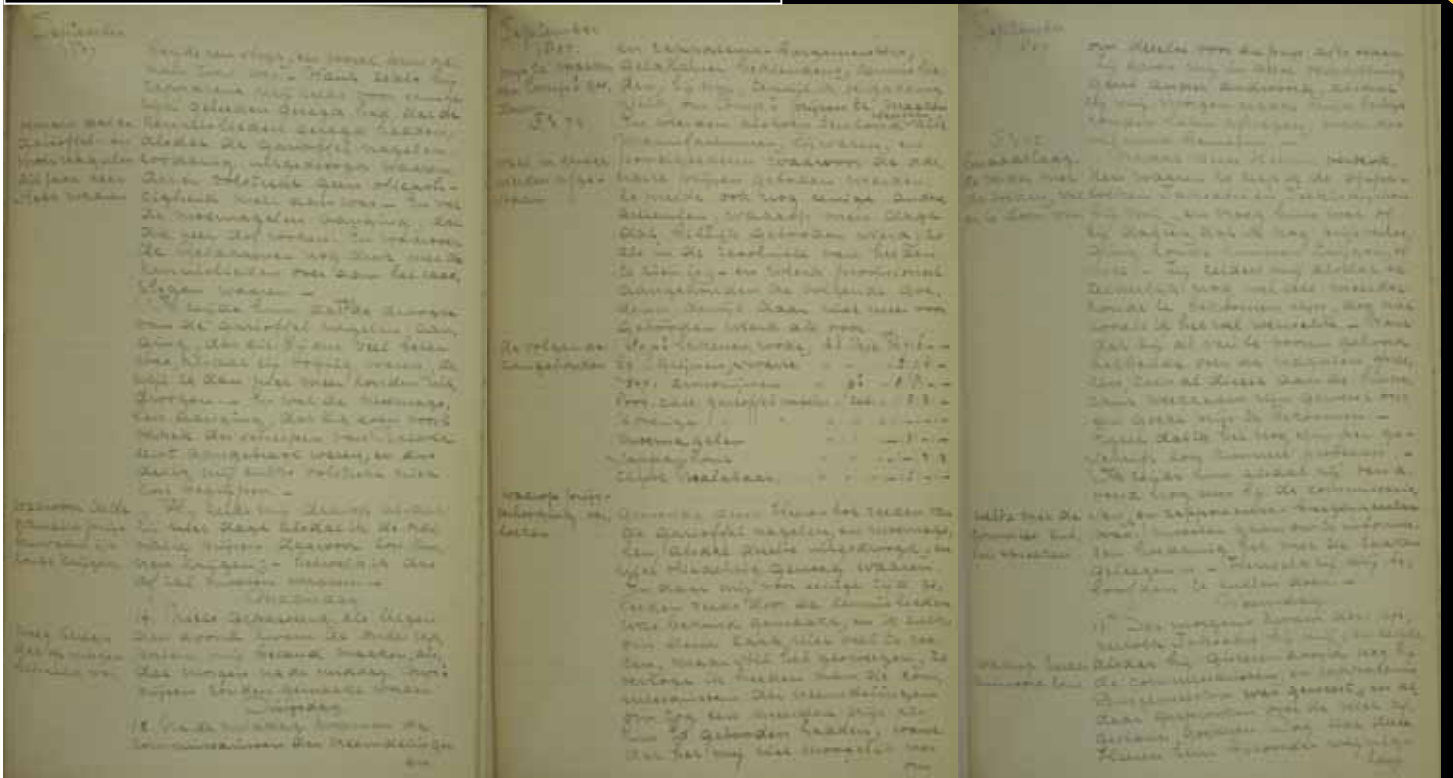
第4回は寛永8(1631)年より万延元(1860)年に至る230年にわたる「蘭館日誌謄写本」です。

(所蔵資料)

- 蘭館日誌の謄写本関係 - 185冊
(謄写本139冊と発送および到着文書等46冊)

(蘭館日誌1807年9月15日)

商館長ドーフと出島での交易等に携わる役人たち、その通訳を担う大通詞とのやりとり、駆け引きが記され、当時の様子を今に伝えている。





第156代商館長 ヘンドリック・ドーフ・ユニア

ドーフの商館長在任中、イギリス海軍のフェートン号がオランダ船と偽り、長崎に侵入するフェートン号事件(文化5(1808)年)が発生しました。鎖国体制の日本に異国のインパクトを与えた事件でした。その後、ドーフ、長崎奉行らによって臨検体制の改革が行われ、外国船の入国手続きが強化されていきます。その後も外国船の出現は度々起こり、文政8(1925)年の異国船打ち払い令へと続いていきます。

ドーフは、ほとんどの商館長が数年で帰国する中、享和3(1803)年から文化14(1817)年の14年間もの間、オランダ商館長を勤めました。

彼が商館長に就任した頃は、江戸幕府の貿易制限政策やオランダ本国の不安定な情勢や東インド会社の経営不振などの結果、出島の経営も低迷していました。そのような出島の沈滞を脱却しようと努め、しだいに高まっていく異国の驚異に対して日本の当局者をうまく補佐し、時には利用することで出島の苦境を乗り切り、オランダの権益を守りました。

そして、日本とオランダの交流関係は続き、2008年には外交樹立150周年、2009年には、徳川家康がオランダに公式な通商許可を与えて通商400周年を迎えました。

(和訳)『長崎オランダ商館日記三』より抜粋

十五日 火曜日

午後外国人世話掛、年番長年寄、会所役および目利たちが私のところへ来て、本方荷物値組みのため会議を開いた。

そこで直ちにすべての反物類や亜麻布および秤量貨物に通常の値段がつけられ、売り渡された。さらにまた公平に値段がつけられたと思われる他の二、三の品物も、同様に売り渡された。本日の決議録にみられる通りである。次に、提示された価格以上の値段がつけられなかった次の品物はしばらく保留された。すなわち

赤大羅紗	三〇反	一間につき	七・六テール
黒のごろふくれん	二九反	一反につき	二・七四テール
海黄	五四七反	一反につき	八・八テール
丁子	八〇〇〇斤	一斤につき	一・三五テール
余分 丁子		一斤につき	一テール
母丁子		一斤につき	〇・三テール
蘇木		一斤につき	〇・〇五テール
マラパル産阿仙茶		一斤につき	〇・二テール

これらの人々は、丁子と母丁子(が安い)理由として、これらのものは乾燥きっていて、十分な油っ気がないと言った。

私はすこし前に目利たちからこのことを前もって知らされていたが、これについてはふれずにだましていることにした。そして、私は今日外国人世話掛の役人に対して、上記の人々がつけた値段よりも高い価格を要求した。何故なら、これらの商品をこの値段で売り渡すことは、私としてはでき難いことだったからである。

彼らは、この会議で私がさらにどのような決定したか、明日尋ねさせようという以外、何も答えなかった。そこで私は我慢しなければならなかった。

これらの人々が立ち去ったあとで、大通詞作三郎と助左衛門を私のところに呼び、私がなお値増しを得ることができるか否かにつき彼らがどう考えているかを尋ねた。彼らは答えた。たぶん少しは高くなるが、私が希望するようにはいかないだろう。何故なら丁子については、彼らは前もって聞いていたので、その時すでによい値を得ようと、直ちに内々で働きかけていたからである、いずれにせよこのことについては、私はもう一度書面でたしかめてみるべきだろう、と。

そこで、彼らが夕方もう一度外国人世話掛のところへ行き、それがどうなったかを問い合わせてほしい、と私は彼らに言った。彼らはやってみようかと約束した。



第1000回を迎えた第1部部会

平成21年6月12日の例会において、第1部部会が1000回を迎えました。

日本学士院第1部の部会は、1906(明治39)年に、第1部(哲学及社会的諸学科)と第2部(理学及其応用諸学科)の二部制がとられてから、今年の6月に1,000回を迎えました。これは、第2部に遅れること9ヶ月、また総会の会議回数に及ばないこと30回です。その間の事情を私はよくは知りません。しかし第1部がサボっていたとか、揉めごとがあったとかということではないようです。様々な変転のあった日本の過去103年にわたって、同じ組織「学士院」の名前が「帝国学士院」から「日本学士院」に変わりましたが)の会議が切れ目なしに1,000回も続けられてきたこと自体、偉業と言えるでしょう(自画自賛と評されそうですが)。

昨年9月に第2部部会が1000回を迎えたときに早石修会員が「ニュースレター」(No. 2)への寄稿の中で述べられたように、その百年余りの間、歴代の会員は、日本を代表する優れた学者に恩賜賞・日本学士院賞を授与し、また日本のアカデミーに相応しい新会員を後継者として選定することに、真摯な努力

を積み重ね、今日に至りました。

第1部と第2部の会員を統計的に比較したとき、一つの違いは、外国アカデミーの会員、外国学会等の名誉会員の数が、22対110と、第2部の方が圧倒的に多いことです。何故そのような大差があるのでしょうか？ 会員諸氏のご教示を頂きたいと思います。“強い自国語”を持つフランスやドイツの学者達にも、文系と理系の間に同じような差があるかもしれません。理系では国境の壁の高さが低く、今や lingua franca は英語であり、理系の学者にとっては、同じ専門の諸外国の学者は常に競争相手であり、また研究協力の仲間でもあると考えて研鑽しておられると思いますが、第1部では本来的に国境の壁が高い分野が少なくありません。

文学・歴史はもとより、今日的な社会保障・教育・医療政策等に関する研究の成果は、フランス・ドイツでも、自国語で発表される比率が高いのではないのでしょうか？ 他方、中国研究や仏教学の一部では、日本の研究水準が高く、それらの分野を専攻する研究者は、中

国語の他に日本語も学ばなければならない、と豪州の学者から伺ったことがあります。

しかし私は第1部の諸分野でも、日本の学者がもっと盛んに国際的に活躍することを切に願って已みません。理系の論文の「質」の国際比較で、最近10年間に日本の順位が4位から9位に落ちたという記事(『朝日新聞』9月7日付)も、どういうことなのか、一寸、気になります。

もう一つ、統計的に、最近では第2部会員の方々のほうが第1部会員よりも長寿のように見えます。最近10年間に、90歳を迎えられた会員の慶祝の集いは、第1部の17人に対して、第2部では26人と50%以上も多いのです。第2部会員がより長寿なのは何故でしょうか？ もっとも、その前の10年間では双方各18人と拮抗していましたが、最近10年の50%以上もの差は「統計的に有意」とは言えないのかもしれませんが、

小宮隆太郎会員(第1部第3分科)



第1000回部会を迎えて学士院ロビーの階段で記念撮影をする第1部会員。前左より星野英一会員、築島 裕会員、小田 滋会員、久保正彰院長、中根千枝会員、小宮隆太郎会員、河本一郎会員、中川久定会員。(計42名)



昭和3年、京都市生まれ
 東京大学経済学部卒業。東京大学
 経済学部助教授。ハーバード大学
 経済研究所所員、スタンフォード大
 学経済学部客員教授を経て、東京
 大学経済学部教授。
 昭和53年東京大学経済学部長。
 昭和56年東京大学総長特別補佐。
 平成8年文化功労者。
 平成14年文化勲章。
 平成2年12月から日本学士院会員

新客員の選定

平成21年3月12日開催の第1027回総会において李 鎬汪氏を、また、4月13日開催の第1028回総会において真鍋淑郎氏を、日本学士院客員に選定しました。



李 鎬汪 博士 (ウイルス学)

[大韓民国漢灘生命科学財団理事長]

李 鎬汪博士はウイルス学を専攻し、ミネソタ大学で1957年にPh.D.を取得した。

特筆すべき業績は、中国東北部での流行性出血熱(1930年代)、韓国で流行した韓国出血熱(1950年代)の病原ウイルスを分類同定したことである。

それらはハンタウイルスと定義された、出血熱病原体の一群である。李博士はこのウイルスの予防・診断に寄与した。



眞鍋 淑郎 博士 (気象学、気候学)

[プリンストン大学大気海洋科学プログラム上級研究員]

眞鍋淑郎博士は東京大学で気象学を専攻し学位を得た後招かれて米国に渡り、40年にわたって同国海洋大気庁・地球流体力学研究所で研究を続けて来た。

同博士の大きな業績は、コンピュータによる気候のシミュレーション・モデルを開発し、それをを用いて気候の成り立ちと変動を解明するという新しい研究分野を開拓したことである。

総会における論文報告・談話

総会では、第1部(人文科学部門)は会員が論文を提出、第2部(自然科学部門)では会員の談話とともに学術上優れた外部研究者の論文が紹介されます。以下は、最近提出された会員の論文・談話です。

総会	部	題 目	提出(担当)者
1028回	第1部	伝統日本の諸人口・家族パターン(合同談話会)	速 水 融
		ヤコブス・ホイエルとアリストファネス研究	久 保 正 彰
1029回	第1部	明治新政府の「参与」としての横井小楠の最後の十ヶ月	源 了 圓
		都留重人とハーバート・ノーマン	小宮 隆太郎
	第2部	考える脳の仕組み 内部モデル仮説からの考察(談話)	伊 藤 正 男
1030回	第1部	投票行動の若干のモデル	三 宅 一 郎
		米ドル過大評価をめぐって	新 開 陽 一
	第2部	電子の波で見るミクロの世界(談話)	外 村 彰
1031回	第1部	マグダラのマリア再考	荒 井 献
		銀行と証券の関係の変遷について -「大恐慌」から今回の金融危機まで-	河 本 一 郎

(寄稿文)

3年3ヶ月の在籍で...

河野 浩前事務長

内示を受けたのは平成17年12月の中頃であった。局長から「日本学士院事務長です。今、あそこは大変だけれどもがんばって。」と伝えられたが、そこはいいなんぞや、というのが第一印象であった。

席に戻りホームページを見る。今のようホームページの内容は充実していなかったが、少なくとも会員の名簿はあり、視たり聴いたりしたことのあるそうそうたる名前が列挙されていた。年が明けて平成18年1月、事務長として赴任した。それまでの仕事が小学生から高校生を相手にしたものであったせいか、学士院の雰囲気は暗く感じた。だがこれは会員の先生方や職員のせいではなく、当時の学士院を覆っていた暗雲のせいであった。その暗雲が晴れたのは年度が明けた4月であった。

心機一転、事務長として学士院の事務を背負って立つ。と書くとなかなか威勢はいいが、実際には120年余の歴史に積み重ねられたものが多く、右から左に動かせるものは殆ど無かった。当初の内は職員の業務遂行の追認をするだけであったのはいささか寂しいものがあったのは否めない。

会員の先生方について記そう。

平均年齢は80歳を超えている。中には90の声を聞こうかという方もおられるのだが、一般的に考えるよりお元気

だ。とはいえ、お年もお年であるから階段の上り下りなど、もし足を取られたりすると簡単に折れてしまうのではないかと不安もつきまとう。ところが実にかくしゃくとしておられる。月に一度の総会の日には院内にこうした方々があふれ、ロッカーのある1階から部会室のある3階へ、総会議場のある2階へ、そして食事時には地階へと移動する様は年齢を感じさせず、まさに壯観(?)であった。

さすがに会員であるからか、人生の長い積み重ねからかは詳らかではないが人格者、特に事務職員に対して優しい方が多いように感じた。これまでの数少ない大学勤務経験から、先生方というものはわがままで自分勝手な者が多い、と感じていたのでこれはちょっとした驚きであったのを覚えている。消防法の改正により避難訓練が義務付けられたが、事務だけの訓練ではいざというときには役に立たない。どうせなら、ということで総会の日には会員を巻き込んで、部会室のある3階から1階まで階段を降りて避難する訓練を実施した。総会の日にはえてしてタイトなスケジュールになるが、その合間に文句も言わず黙々と避難訓練にいそむ先生方を拝見し一種の感動を覚えた。国内外の有名な賞を数々お持ちで、かつ年齢80の方々を避難訓練に参加させた事務長

は学士院の120年余の歴史上初めてだったのではないかと、そう思うとなかなか思い出深い。

仕事では、初めて司会を受け賜った「日本学士院賞授賞式」が一番印象に残っている。これまで皇族というものはテレビの画面の中で見受けるものであったが、授賞式にお出ましになるのである。ほんの数メートル先に天皇后両陛下がおられる脇で、進行役を務めるのである。大きな失敗もなく遂行できたのは幸いであった。

3年3ヶ月に亘り事務長として在籍したが、学士院のために何かできたのだろうか、今でも自問する。トイレを温水洗浄にしたのは一つの貢献とは自負しているが、3年に亘る実績としてはいささか寂しい。しかしながら、この激動の時代につつがなく、会員の方々にご迷惑をおかけすることなく、静かに時を過ごすことができたということで、良しとせねばなるまい。

平成22年には日本学士院賞授賞式が第100回を迎える。会員は終身であり、自分も終身とはいわず5年くらい在籍して、この100回目の授賞式及び式典を完遂したかったのだが、かなわぬ夢となった。今は違う立場から式典の成功と会員の先生方の健やかなるご活躍を祈る次第である。



第96回授賞式風景



授賞式での司会(左)



第1部部長の選任



平成21年6月12日(金)の第1部部会において部長選挙の結果、星野英一会員を第1部部長に選任しました。

星野英一(第2分科):大正15年、神奈川県生まれ
 東京大学法学部法律学科卒業。東京大学法学部助教授、教授。
 東京大学名誉教授。千葉大学法経学部教授、放送大学教養学部教授を歴任。
 平成5年紫綬褒章。平成19年文化功労者。
 平成8年12月から日本学士院会員。

会館施設の利用案内

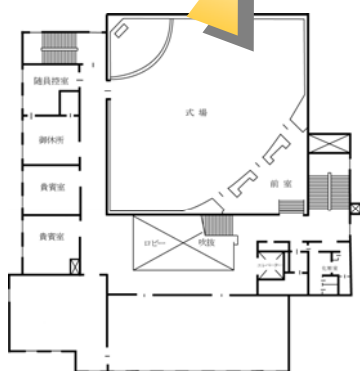


建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小六つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、庶務係までお問い合わせください。

(平成21年4月以降の会館利用状況)

利用年月日	利用目的・内容
平成21年 9月11日	「宗教とテューダー朝演劇の成立」研究会
平成21年11月20日	第9回山崎貞一賞贈呈式
平成21年11月30日	国際生物学賞授賞式



寄附のご案内

民間企業、団体、個人等から広く寄附金を受け入れ、学術の振興に資する事業を実施しています。金額の多少にかかわらず趣旨に賛同される方々からのお申し出を期待しています。

なお、本院への寄附金は国に対する寄附金として、寄附者が個人の場合

は、所得より「寄附金控除」の適用を受け、法人の場合は、「寄附金損金算入」の特例が適用されます(関係法令:所得税法第37条第3項第1号)。

詳細については、会計係までお問い合わせください。

<平成21年度上半期受入実績>

受入年月	個人・団体名	金額
平成21年 5月	財団法人原田積善会	500,000円

会員・客員の逝去

平成21年4月以降、以下の方々が逝去されました。

< 会 員 >

大内 力 会員 (第3分科)	平成21年4月18日	享年90歳
伊藤英覺 会員 (第5分科)	平成21年6月30日	享年84歳
鈴木 弘 会員 (第5分科)	平成21年8月14日	享年94歳

< 客 員 >

Housner George William 客員 (アメリカ)	平成20年11月10日	享年97歳
Ji Xianlin (季 羨林) 客員 (中国)	平成21年7月11日	享年98歳

編集後記

昨年4月に本ニュースレターが発行され始めて、このたび第4号を発行することになりました。

今回は5月に実施された公開講演会や6月に実施された第99回日本学士院賞授賞式の様子のほか、日韓学術フォーラムや外国アカデミーとの交流についてもお伝えいたします。

ご寄稿いただきました日本学士院賞を受賞された先生方や会員の皆様に心より御礼申し上げます。

さて、私事で恐縮ですが、ここ上野公園に勤務するようになり、ある方の勧めに従い近隣を散策しはじめたことから、江戸時代の上野や浅草について興味を持つようになりました。いくつかの本を読み、この上野公園にある寛永寺は徳川家の菩提寺であり江戸城の鬼門に位置すること、京都の鬼門に位置する比叡山と同様に寛永寺も東叡山と呼ばれていることなどを知ることができ更に

興味が深まりました。また、浅草は浅草寺を中心として江戸時代随一の繁華街であったことや江戸中に上水道が張り巡らされていたこと、火事に悩まされていたが、エコで清潔な大都市であったことなどは、時代小説などでは読んでいたのですが、改めて当時の人々の暮らしが偲ばれます。現在でも都内には当時から地名や史跡が数多く残っており、今後そういった史跡を休日巡る散策も楽しいのではないかと思いはじめたところです。

最後になりますが、来年迎える第100回授賞式の記念事業について、その企画と準備が急ピッチで進んでおり、委員会メンバーを中心として関係者のご努力には敬意を表するばかりです。必ずや学士院らしい記念事業になることでしょう。

(A)

お問い合わせ先

日本学士院

〒110-0007
東京都台東区上野公園7-32
電話: (03)3822-2101
FAX: (03)3822-2105
E-mail: jimujapan-acad.go.jp

ホームページもご覧ください。
<http://www.japan-acad.go.jp/>